

チ発。ところが貨車は西進、一月二十八日チタ着

〃 三月二十三日 チタ発

〃 三月二十五日 アマザール着

〃 三月二十六日 アマザール発

〃 三月二十八日 再度チタ着

〃 四月十七日 チタ発 二百人

〃 四月二十三日 ナホトカ着

〃 四月二十八日 収容所入り

〃 五月二十四日 ナホトカ発 乗船

〃 五月二十七日 舞鶴入港

〃 五月二十八日 日本本土舞鶴上陸

〃 五月三十一日 舞鶴発

〃 六月一日 帰宅

収容期間……約二年

### (十一) 帰国後の生活

シベリア抑留の苦難は人生によく試練だと思つた。幸い、東京電力㈱に入社できて無事定年退職し、現在は息子の時代で（市役所勤務）、妻と平

穩に暮らしております。

(十二) 最後に子孫や国民に言い遺したいこと

主義主張は違つても戦争は絶対にしないこと。

国民にもっと道徳教育をしてほしいこと。

個人に対し、社会に対して責任のある人間になつてほしいこと。

### 抑留中の労苦記録

山梨県 青木和夫

(一) 出生から入隊まで

①どこで出生……静岡県沼津市大岡下石田

②いつ出生……大正十五（一九二六）年十一月二十

八日

③学校……尋常高等小学校―旧制中学校卒業

(二) ソ連軍侵攻前

①いつ入隊……昭和二十（一九四五）年五月

現役・召集

② 入隊場所……牡丹江省穆稜第八〇二部隊第一機

③ 駐屯地……鏡泊湖の山中陣地構築

戦地……満州鏡泊湖畔

(三) ソ連軍侵攻をどこで受けた

① いつ……昭和二十年八月九日

② どこで……満州東滿総省鏡泊湖山中

③ どんな状況で……いよいよ戦争にとり八月九日、すべての私物は捨て、米と塩のみ持参して重

機かつぎ山中へ出発。

(四) 終戦

① 詔勅……全然聞いておりません。

② 感想……軍旗受領に五月行ったばかりなのにもう

焼き捨てたという情報が十六、七日頃あり、何も

分からぬまま過ぎす。初年兵のため。

③ どう終戦したか……重機を馬小屋の下に埋め、帯

剣は牡丹江ですべて捨ててる。

④ 武装解除から収容所入まで……牡丹江飛行場で編

成替えあり、他中隊の生き残りの兵隊を吸収して

二千人となり、一列車に釜の支度をして一週間か

かってピロビジャン地区オブルーチェへ。ヒンガ

ンに六百人、選抜の体の丈夫な兵隊のみトラック

で出発。着いた所は、天幕を張り三百人ずつの宿

舎。九月二十日頃。

(五) シベリア抑留地への移送

① いつ頃……九月十日頃

② この地点からどこへ送られた……牡丹江飛行場

からハバロフスク經由ピロビジャン地区へ

③ 東京ダモイと騙され家畜貨車で……千人一車両

何日くらい……七日くらい

④ 第一次入ソ場所……ピロビジャン地区オブルー

チェ

いつ……九月中旬

(六) 抑留地の生活

① 第一次収容所どこ……ピロビジャン地区ヒンガン

収容人員……六百人

② 生活の様子……天幕生活で十月から十一月と一日

ずつ寒さが増してゆく。

住まい……ログハウスを自分たちで作る。

食事……一日三回だが、余りの少なさに井戸端で水を飲みつつ寝る人も。

仕事……すべての仕事にノルマが課せられる。

衣服……凍傷にならぬように特に足の保温に

入浴……石を焼いて水をかけ、サウナのように入る。

シラミ……ドラム缶の火で振ればバチバチと飛び出すくらいの多さだ。

南京虫等……ノミが多かった。

### ③作業の状況

主作業……錫の鉱山勤務、その他ファープリカ作り（工場）、伐採、水道管敷設、家屋造りなど。

ノルマ達成状況……五〇%できず。

④給与……三年目から、山の鉱石を持って来て、叩いて水で流し錫のみにして売却、それで給食以外の食料を買って生活する。

### （七） 労役

①どういう労役についたか……水源地、伐採、錫の

鉱山

②収容人員……六百人、ヒンガンのみ。

宿舎……二棟建てる。

③冬最低温度……零下三八度、火に当たっている方は熱く、背中は凄く寒い。

冬はどうして生活したか……夏と同じ作業をした。

④労役の時間……夏冬八時間

⑤労役に堪えられない者はどうされたか……営内の軽作業か入院（他のラーゲル）へ。

⑥常日頃健康を保つ上で役に立つことは……何でもかまわず山野草などを食べた。

⑦衣服について扱われたことは……パンツ、褌はなし、袴下をはいてズボン。

### （八） 抑留者の統制管理

①労役につく基準……将校がいた頃は将校任せ。兵隊になってからは、各班長との話し合いで。

②労役免除……なし。何らかの軽作業あり。

③健康管理……凍傷だけは皆で注意し合って防いだ。

④点呼・作業場への出入……朝夕必ず点呼あり。警戒兵は必ず帰りまで付いた。

⑤食事の状況……『平和の礎』の通りで、毎食毎食が戦争のようだった。

⑥休日……一週間毎に休み。

⑦収容所施設、構造……ログハウス造り二棟。三百人×二収容の大きな家。寝床は二階。

⑧洗脳教育……原始共産時代から共産主義までよく勉強させられた。

⑨収容所生活全般……バラ線三重の垣根、四隅に歩哨二十四時間。

### (九) 抑留中の生活と極限状態

①乗りこえてきた信念……故郷に帰るまでは絶対に無駄死はせぬと、お互い仲間同士で励まして過ごした。

②生死の境、死に直面したときの感想……昭和二十年十月のある月夜の晩、四人で脱走を企てたが、月を眺めて中止した。遠山、福井、佐藤と。その前日、佐々木君殺される。

③心身を支えた工夫……アルミを溶かしスプーン、フォークなどの小物を磨いてきれいに作り上げ、気を紛らわす。

### (十) 帰還

①ダモイをいつ、どこで聞いたか……ピロピジャンで講習聞いているうちにダモイの指示あり。

②集結地……ナホトカ

③乗船人……遠州丸

④船内生活……大分若手と年寄りの間で採めた。

⑤上陸地……舞鶴港

⑥収容期間……昭和二十年九月―二十三年八月、三年間

### (十一) 帰国後の生活

各所を転々として七回も職を変えざるを得なかった。

勤務先の倒産、主人の死亡などのため、四十歳以後、食堂の経営に踏み切り、人並みの生活ができるようになった。(東海食品―オガ屑の運搬―ゴムテープの製造―熱海のソバ屋―遠山織物(白血

病)―運送屋―義勇軍の挫折を経てだるま食堂を  
開業)

(十二) 最後に子孫や国民に言い遺したいこと

戦争の悲惨さという事実を目の前に見て、二度と同じような運命をたどりたくない気持ちでいっぱいです。終戦直後のソ連の行動たるもの、筆舌に尽くし難い状態でした。目の前を通るシベリア鉄道の貨車の中には我々が築いた尊い財産、家具は言うに及ばず、豊から箒、またアンペラまで山のように積んで西の方へ毎日のように走る。今でも目に焼きついています。その上、捕虜を厳寒のシベリアの地へ何十万人も送り込み、自国の復興のため強制労働で酷使し多くの戦友の命まで亡くし、地獄のような生活を強いられ、帰国してもその後、後遺症に悩んだ人も数多くおりました。

## 抑留中の労苦記録

山梨県 渡辺清士

(一) 出生から入隊まで

- ① どこで出生……山梨県南都留郡河口湖町浅川
- ② いつ出生……大正十三(一九二四)年八月一日
- ③ 学校……船津尋常高等小学校高三卒業

(二) ソ連軍侵攻前

- ① いつ入隊……昭和十九(一九四四)年十二月一日

現役

- ② 入隊場所……東部六部隊第五中隊
  - ③ 駐屯地……北支青城(という町名)
- (三) ソ連軍侵攻をどこで受けた
- ① いつ……昭和二十年八月十五日
  - ② どこで……北朝鮮
  - ③ どんな状況で……兵器を興南女学校へ収めた。

(四) 終戦